

山岳遭難対策あれこれ

10月31日に、青森県山岳遭難防止対策協議会黒石支部主催の、「遭難発生時における装備資機材使用要領等訓練」に、警察、消防の方々にまじって参加させていただいた。



まずは、背負いハーネスの使い方。遭難者など要救助者を背負って運ぶ専門用具であり、はじめてお目にかかる。しっかりした造りで背負いやすそうであるが、それ自体結構かさばる。そういったものがない場合は、空にしたザックとレインスーツで、背負い搬送ができると実演していただいた。知っているがやったことはない。



続いて、ロープワーク。背負い搬送や、レイジングシステムにも必要な技術。

もやい結び、エイトノット、ダブルエイトノット、巻き結び、ラビットノット。聞いたこと、習ったことはある気がするがすぐ忘れる。



そして、レイジングシステム。

山岳遭難は、道迷いが多いが滑落も多い。そんな滑落者を引き上げる技術で、滑車の原理により小さな力で要救助者を引き上げることができるシステムのようなのだ。



実演は 1/3 引き上げ（重量が三分の一になる）だったと思うが、ネットなど見れば 1/9 にするシステムもあるようだ。しかし、ロープは当然のこと、カラビナ、プーリーなど専門道具が必要だ。

その後は、室内で青森県警が活用に関する協定を締結している地図アプリ（[県警リンク](#)）の紹介をしていただいた。他にもより専門的で使いやすいというアプリの紹介があったが、自分が使っているアプリであり少し嬉しい。

クマに関しての情報提供（[県自然保護課パンフリンク](#)）もあり、クマにとって「人間がごちそう」になっているという言葉には衝撃を受ける。

また、心肺蘇生法では、胸部を5cmも押す必要があるが、うまく押せているか計測できる機器で、百戦錬磨の強者たちも感触を確かめていた。



ここ数日の現場の巡視で、職員や林業事業体に対して心肺蘇生法等の救急法を確認するようお願いしてきたが、動画で確認するだけでは不安は否めない。

山岳遭難対策などの高度な技術は応用が利く。業務や日常生活にも取り入れたい。

津軽森林管理署 署長